



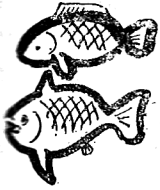
麦 秋

麦秋という言葉がある。秋とは百穀の熟する季節であり、収穫期の麦の穂波は、秋の稲の穂波にも似て見渡す限りの麦畑には、冬の寒さにもめげずにしっかりと根を張つて、今やその収穫期を迎えた。本県における麦類の収穫量は、昭和30年から34年までを比較すると、裸麦のみが減少傾向にあり、大麦、ビール麦、小麦、らい麦、えん麦ともに増加して来ている。

その詳細については、下表のとおりである。

昭和	大 麦	ビール麦	裸 麦	小 麦	らい麦	えん麦
30	38,964ha 100,503,596kg	3,204 8,011,178	3,392 7,188,915	37,524 76,518,600	22 37,747	98 109,541
31	40,753 107,602,361	2,945 6,947,494	2,989 6,732,566	37,546 70,448,741	34 62,629	57 60,007
32	41,096 122,198,025	3,348 9,369,900	2,444 6,471,716	36,146 86,568,508	47 107,304	90 105,446
33	40,372 97,318,635	4,351 9,408,724	2,269 4,654,646	35,185 68,879,059	67 145,051	95 103,163
34	42,377 125,728,786	4,998 12,471,238	2,316 5,531,056	35,537 84,817,882	22 37,747	87 113,111

※農業基本調査より



標本調査への手引(1)

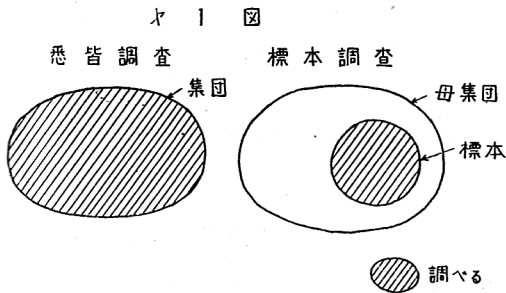
総理府統計局 高橋史朗

第1部 標本調査の理論

1 標本調査とは……

統計を作成するための、あるいは、もつと直接にいえば、統計表を作成するためにおこなう調査を、統計調査といいます。たとえば、東京都で営業している飲食店について、この6月の平均売上高をもとめるためにおこなう調査、また、その従業員の平均給料をもとめるためにおこなう調査などは、みな統計調査であるわけです。

統計調査は、調査する方法からみて、これを大きく2つに分類することができます。その1は、悉皆調査（または、全部調査ともいう）で、これは調査しようとする集団のすべての統計単位を調査するという方法です。また、その2は、標本調査で、これは、悉皆調査のように統計単位のすべてではなく、その一部を選びだして調査するという方法です。このさいには、一般に、集団を母集団、選びだした統計単位の一部を標本とよびます。たとえば、さきの例で、東京都で営業している飲食店のすべてを調べるのが悉皆調査、また、一部の飲食店だけを調べるのが標本調査です。（第1図参照）



統計調査は、また、統計の種類によつても分類することができます。たとえば、さきの例で、平均売上高をもとめるのは売上高調査、また、平均給料をもとめるのは給料調査というようにも分類できますが、しかし、この分類は、ここでの考察には関係ありません。

統計調査にたいする要請は、これを大きく3つに分けられます。その1は、作成された統計が正確であるということ、その2は、統計の作成が迅速であるということ、その3は、調査の費用が安価であるということです。こ

の3つの要請のうち、あとの第2および第3の点、すなわち、迅速と安価という点で、標本調査が、一般に、悉皆調査よりすぐれていることは、容易にうなづけます。そして、ここに、非常に多くの標本調査が企画されている理由があります。

しかし、第1の点、すなわち、正確という点については、このままでは、標本調査が悉皆調査にくらべてすぐれているとは、到底いえません。なにしろ、標本調査では、標本として、一部の統計単位しか調べないのですから、いま、ある統計（たとえば、平均売上高あるいは平均給料）をもとめようとしても、標本からもとめた数値（これを推定値といいます）が、その統計の真値に一致することは、偶然のほかは、かんがえられないからです。したがって、一寸見た目には、どうしても悉皆調査の方がすぐれていると考えられます。しかし、事実はずしもそうではありません。このことについては、あとで別に説明します。

2 標本調査の特徴

悉皆調査にたいして、標本調査を特徴づけているのは標本の選定です。もちろん、標本調査を企画するには、このほか、たとえば、統計表の様式、調査票の様式なども重要ですが、これらはすべて悉皆調査と共通しているので、特徴とはいえません。このように、標本調査を特徴づけている標本の選定、もつと詳しくいうと、標本選定の方法とそれからの統計作成の方法は、それだけを標本調査全体のうちから切り離して、抽出理論と呼ばれております。

標本調査は、標本である一部の統計単位を調べるわけですが、この標本は、どのように選びだしてもよい、というものでは決してありません。もしも、調査する人がその人だけの考えで、適当とおもつた標本を選んで、これを調べて、統計を作成したとしても、それは万人が満足するものではありません。たとえば、さきの東京都で営業している飲食店の6月の平均売上高をもとめるという例で、調査する人が、飲食店の名簿から、その人だけの考えで、これは適当とおもう飲食店を選んで、調べて平均売上高を推定したとしても、その推定値をみたとき誰もが、もしも、この調査をほかの人がおこなつたならば、もつとまつたく違つた値が得られたのではないかと疑問におもひ、一人好がりとして、その値を信頼しな

いのではないかとおもいます。したがって、標本選定の方法としては、誰がやつても同じ結果がえられ、理論上からみて納得がゆくものを、採用しなければなりません。

この標本選定の方法は、必ず、それからの統計作成の方法を伴います。なぜなら、たとえば、さきの例では、東京都で営業している飲食店の平均売上高がもめたいわけですが、その推定値には、標本に選ばれた飲食店の売上高の算術平均がよいということは、一般にはいえないのです。標本から、どのような方法で、すなわち、どのような推定式で、推定値をもとめるかは、すべて、どのような選定の方法を採用したかにかかっています。決して、算術平均をもめたいのだから、標本でも算術平均をもめればよい、というような単純なものではありません。

3 「正確」の意味の変革

まえに、統計調査で要請される第1の点は、作成された統計が正確であるということだと述べましたが、ここで、この「正確」という言葉の意味について説明したいとおもいます。そんなことに、なにか問題があるのかと、疑問におもわれるかも知れませんが、これは非常に重要な意義をもっているのです。

例をひいて説明する方が、理解しやすいとおもうのでここに、日本の人口をとりあげてみます。昨年(昭和34年)の10月1日に、第9回国勢調査がおこなわれましたが、この昭和35年国勢調査によると、昭和35年10月1日現在の日本の人口は、93,418,501人でした。ところで、われわれが普段、日本の人口はどのくらいだろうかと考えるとき、

あるいは、人に質問するとき、このような有効桁数の大きな答えをもとめているのでしょうか。多分、一般にはそうではなくて、たとえば、日本の人口は、何万人までで切つて、9,342万人だぐらいの、有効桁数がせいぜい3桁か4桁ぐらいの答えをもとめているのだとおもいます。そして、それで十分に利用の目的を果しているわけです。

このような場合、はじめの有効桁数が8桁もある答えの方がより正確で、あとの有効桁数が4桁の答えはより不正確だといえるのでしょうか。そうは言えないとおもいます。統計を、過去の事実の記録としてではなく、将来の行動の指針とみると、あとの方の答えも、十分に正確な答えであると言い切ることができます。

これは、「正確」という言葉の意味の大きな変革で、このことが、標本調査を、悉皆調査の代用品でなく、悉皆調査と肩を並べる対等な調査の方法にしているのです。

蛇足かも知れませんが、さきの説明は、決して、国勢調査が必要以上に詳細な統計を作成しているという意味ではありません。なぜなら、国勢調査は、日本の人口を市町村ごとに分けてもとめる、という狙いをもっているからです。すなわち、市町村ごとの人口では、何人というところまでもとめる必要があり、日本全体の人口は、それらを合わせた結果であるからです。

なお、日本の人口は、何人までで切れますが、たとえば、日本の面積は、そうゆう限界がありません。したがって、この例の方が、さきの説明を一層はつきりさせるかも知れませんが。(続)

＝編集部より＝

最近の統計には、数学の占める分野がますます多くなつて来ております。統計が数学の理論を導入することによつて、一層充実したものとなり、より立派な統計調査が、低廉な経費で、速やかに結果を求められるという方法によつて、即ち標本調査なる統計調査によつて、各種の資料を提供できるようになりました。しかし標本調査の中核である抽出理論は、確率論などが入つておるために理解し難い面が多く、と角敬遠し勝ちであります。このようなところから、今回標本調査の理論・標本選定の技巧・標本設計の手引きの三段階に分けて、総理府統計局消費統計課課長補佐・高橋史朗氏に委嘱して特別寄稿をお願いしました。同氏はまた統計職員養成所講師として産業連関や抽出理論を担当しておられ、誠実な講義内容については、研修生の間にも定評があり、6月号から10回にわたつて、なるべく解り易くお話しを進められる予定であります。

昭和36年度統計事務運営方針

総務部統計課

1 まえがき

昭和35年度は、幾多の大調査が相ついで行われ、センサス年とまでいわれた統計事務の多忙な年であった。

昭和36年度の統計事務は、経済の成長につれて若干の新規調査が加えられたが、まず、本年度は昨年度実施した統計調査結果の解析等を行ない行政近代化に即応する資料の整備拡充をはかり、範囲の広い、そして利用価値の高い統計資料の作成に努めたい。一面社会構造がますます複雑化している現今、社会、経済、文化の指標の基礎を打ち立てるものは、統計の力によるものである。

よつて本県の人口構成を解明し、他面産業構造の形成状態、県民生活の水準をも調査し、県勢の実態を把握していきたい。

2 基本的な態度

(1) 近代国家における統計の持つ意義を深く認識し、その使命の重大なることを自覚して、社会の進展に対応する統計資料の作成にあたらなければならない。このためには、まず、統計技術の研さんに努めることはもちろんであるが、統計の最大の目標とする真実性のある、しかも精度の高い統計を作ることに更に前進してゆくことが肝要である。

(2) 今回の県機構改革は、県民がよりよい環境で豊かな生活を享受するには、県政のあり方はいかにあるべきであろうかという観点から行われたものである。

自然の未開を開くには、人の力を加えることが必要であり、本県行政の方向を樹立し、これを達成するには、統計の力が必然性をもつものである。

かかる行政の転換期における、統計の役割は、常に県行政に直結した統計資料でなければならない。さいわい昨年度は、国勢調査、世界農林業センサス、商業工業、事業所調査等を実施したので、これを整備し相互の関連を考慮しつつ、調査結果の解析をおこない行政施策の基礎資料として提供したい。

(3) 統計は、従来官庁統計として発達してきた歴史をもつものであるが、近時産業、経済の高度な成長につれ民間企業においても経営の合理化、能率化をはかるため、統計の利用がますます増大してきたので統計思想の普及に一層の努力をいたしたい。なお、これがためには、統計結果の早期公表等に更に創意工夫をこらし時宜に適した統計資料を提供したい。

3 重点施策

(1) 県民所得推計

県民所得推計は、産業構造の変遷とその特質、生産力の高さとその発展の速度、あるいは所得分布の状況等の実態を生産、分配、支出の三つの角度から総合的に解明することを目的としている。

本年度実施する昭和35年県民所得推計については、結果の表章項目地域区分等に更に検討を加え、県の振興計画に即応した精度の高い県民所得推計を行ない早期に公表したい。

(2) 農業基本調査

この調査は、本県農林行政の円滑な遂行をはかるための基本的資料を提供する目的で行なうもので、企画にあたっては、つねに調査項目、内容等に検討を加えてきたが更に本年度は、学識経験者、庁内関係部課、その他各方向の意見を徴して、農林行政の高度化に即応した利用範囲の広い統計資料の作成につとめたい。

(3) 農産物商品化程度別農家統計

この調査は、1960年世界農林業センサス調査票を活用して、農産物の商品化程度別農家統計を作成して、転換期に立つ我国農業構造の分析資料を提供する目的で行なうものである。また、本県農業行政の資料としても利用価値の高い資料の作成につとめたい。

(4) 各省所管の指定統計

総理府、文部省、通商産業省、労働省、経済企画庁等のもとに行われている。各種の全数調査、あるいは標本調査があり、いずれも重要な意義をもつ指定統計であるので、正確で迅速に調査を進めて行くことにつとめたい。なお、これら調査の結果については、可能な範囲において県、市町村はもちろんその他各方面の利用に役立たせたい。

(5) 統計広報と統計書の編さん

現在発刊している各種統計書は、行政の施策を立てるうえに、また民間企業の経営合理化等の資料として広く利用されており、本年度も引き続き茨城県統計書県勢要覧、統計図表、統計茨城、統計だよりなどの定期刊行物のほか、県民所得推計、農業基本調査また、各種調査による統計書を随時刊行して行く計画であるが、従来の編集の仕方にも検討を加え内容の平易化につとめ統計が一般に親しみやすくなるよう心掛け、県民のめざす生活向上の理想を實踐する指標に役立たせたい。

(6) 統計関係者の資質向上

近時統計調査内容がますます複雑化し、これにたずさわる者は、予想外の労苦があるので永年勤続で成績優良の者には、表彰等を行ない、その労をねぎらうとともに、つねに調査員の指導訓練を行ない、資質の向上につとめたい。また、統計職員の資質向上策としても各種講習会を開催し、本年度は目でみる統計という目的のもとに統計図表作成のあり方、地方産業開発に伴う地域経済の分析に必然性をもつ、県、市町村民所得推計の進め方などに力を入れていきたい。

4 あとがき

統計職員は、常に自己に与えられた職責について限りない意欲と興味をもち統計マンとしての豊かな常識と高い誇りをけん持し、本年度の、統計事務の円滑な運営の向上に最善を期したい。